

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第十八巻第三号（通巻第一〇七号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第 207号

7. 2011

世渡り

品川 鈴子

峯雲のくづれし笠に富士隠る

佛前に歪み泥つき真桑瓜

昼寝覚め難聴の世は音絶えて

蝉声もきこえぬ耳に電話また



聞えねば書く世渡りの蟬しぐれ
急行でバナナ立ち食ひ法務員
浜芦屋灼ビル並ぶ生家あと
炎帝の御許へ壮齡子煩惱
誓子似の眉目遣らずの夕立か
断ると漸く決まる蛇に遭ひ



玉鈴

大阪 武田ともこ

冴返る奥能登平氏の揚羽紋
雪解水幽し能登の大伽藍
春の風邪順番待ちて砂の風呂
筏には成らず花びら下りゆく
花蔭に席しつらへるカフェテラス

愛媛 武智 恭子

鳴き声の初鶯に和む朝
杖つきて桜吹雪の中に立つ
雨降りて花びらつける鳥が飛ぶ
梨の花小枝揺がす小鳥かな
桃の花活けて喜ぶ孫の顔

兵庫 田中 佳子

孔雀羽四方に挑ぐる春休み
串団子セーラー服の花衣
大峰へ続く坂道すみれ草
春風にモデルのごとく鱗鱗来る
春うらら手紙の主はしづみぬし

吟

大阪 谷 泰子

鳩尾に衝撃走る春の地震
冴え返る二〇一・三・一
鳥曇義弟の無事を確認す
避難所にこの粕汁を届けたし
母植糸し彼岸桜は紅淡く

大阪 角谷美恵子

長考の将棋名人雛屏風
髪結ひて写経三昧春の雷
温む水伸ばすつもりの髪を切り
初桜赤児の笑みは真珠色
桜貝指しやぶりつつ眠れる児

愛媛 年森 恭子

新造の庭に雨得て初蛙
下校児の声と重なる初蛙
管理職退きて堂々茄子を植糸
七年の回り道経て春炬燵
春シヨールとりて婚約告げにけり

兵庫 内藤 三男

耕せる土に余生を癒さるる
採血の小さき枕や春の雲
踏青やおだてに乗りて一万歩
轉りの中を機関車向き換へる
目刺焼いて老マルキスト矍鑠と

兵庫 中尾 廣美

貝拾ひペンダントとす島の春
群舞する蝶に言葉のあるごとく
春の灯の一つづつ消え北斗星
生きてねと祈る地震禍辛夷咲く
春の葬柩に折鶴入れる妻

兵庫 中島 節子

国中の心が一つ春息吹く
「京」といふ汚染の数値春寒し
あの牙は？破壊力は何処？春の海
前を向き踏出す一步さくら咲く
被災地に爛漫の春早く来よ

大阪 中島 霞

スフィックス像に乳首や館涼し
円盤投げのポーズに汗の気配なし
夏蝶とニアミスもあり燕
薔薇園に少なし男性名の花
ターシャの庭程遠くとも草を引く

大阪 中田 寿子

地震津波日本憂ひて春寒し
辛夷咲く見上げその時正直に
屋上は若草育つエコ住い
保津川の絶える事なき花筏
桜見る骨の髄まで日本人

神奈川 永塚 尚代

春寒く大地震あとの喪の心
がんばれと言はず桜を届けたし
オブジェの手長く天指す春うらら
長き旅終へて黄砂の着地かな
ひとこまの帰らぬ昔つくしんぼ

大阪 野口喜久子

鳥雲に地震の安否を問ふ電話
放射線急旋回のつばくらめ
ひとり居の寝嵩はうすき月おぼろ
行く春に菓子空箱捨てがたし
欄干に胸あづける花堤

兵庫 蓮尾みどり

春大根バーコード付け入院す
オペ台に老軀をさらす菜種河豚
居乍らにして病窓の遠桜
談話室へ不在投票春の蠅
点滴をや引きずるものの多き春

兵庫 長谷川 鮎

病葉や東南アジアの経済論
ねむの花白寿を祝う高台に
山の名を思い出せなく夏蕨
青芝の広場にパイプ仮舞台
涼風の夜の芝生にカントォーネ

兵庫 林 哲夫

雛の宵母の箏曲声自慢
筆と墨花桃の枝棺に添へ
春しぐれ高齢の喪主絶句せり
兄の書に白魚の膳供へけり
黄水仙一輪挿して七七忌

兵庫 林 美智

たんぽぽの地震に耐へし茎短か
千光寺はな酩に誓子句碑
おにぎりを食めばしきりに花吹雪
雑草にまじる三ツ目路の薑
紙風船大きく息を避難所へ

兵庫 福島 松子

花筏寄せ分け番の鳥遊ぶ
会話またその場限りの花の宴
花の下知らぬ人とも立ち話
湧き上がる雲と見紛ふ老木蓮
瞬きもひと時忘れ花の海

愛媛 福田かよ子

門前に泥つき春菜盛られ売る
春靄の瀬戸の吊り橋老と犬
山霞シルエツトとなる河童橋
柿若葉佛並びて路傍石
チューリップ這う児も畑に四世代

愛媛 藤井久仁子

大切に着て飽きてゐる春コート
耳ふさぐ島の伝説春の雷
高畝の一直線に双葉出づ
草萌や動くものなき余呉の湖
耳慣れぬ難病とやら花ミモザ

兵庫 藤田かもめ

大川の橋より橋へ春の風
曲水の盃に混じりて笹小舟
天守より俯瞰の四方花さかん
城内の巨石そびらに姥桜
種案山子ちよつとお洒落なベレー帽

兵庫 史 あかり

だぶだぶの制服花の門くぐる
桃の花三年がかり歯の矯正
ブラシもて河馬の歯磨き風光る
亀の瀬の地すべり跡の和たんぽぽ
算木積堅牢にして花の城

鈴の奏

品川鈴子選

姥流のもんじや仕上がる日のうらら 東京 松本 アイ

春の星句座のおしやべりその続き

春眠にきざむリズムや雨の朝

雪解道うかと飛び出し水びたし

干拓地伸びていびつの春の湖 兵庫 中村 碧泉

春暁の覚めざるや島灯を連ね

涙すぐ乾きて少女卒業す

スタイリスト腰に懐炉のふくれぬて 兵庫 長瀬 節子

丸太道行き交ふたびに椿落つ

露のたう犬もじやれつく水の辺に

古里の駅舎変はらず山笑ふ

雉の来てざわめき起こる里鴉 兵庫 前田 玲子

花見つつ相槌うてば知らぬ人

鶯餅懐紙の手前折りて食ぶ

線路横二体の地蔵に風光る

復活祭指輪の光るくすり指

夏めきてわれもペディキュアしてみたり 兵庫 堀口香代子

棒のごと立つバラの枝新芽吹き

どの店もカーネーションで溢れる日

いち早く更衣せしうなじかな

花薺故山につらき思いあり 兵庫 岡田満喜子

被災地の球児春泥ものとせず

春灯の港倉庫に次々と

春風を羽根いっばいにコウノトリ

去る友と新しき友春来る 兵庫 松尾 静代

木々芽ぶき朝日さし来て華やぎぬ

うぐひすの高音誘ふ茶席入り

つる首に一輪さしぬ黒椿

夜半の春ネオンまぶしいソウル街 兵庫 中村 吟子

いそいそと旅の身仕度春の宵

春うらら漢江の流れたゆみなく

リラの花異国エステで眉描く

乖離したままの交渉春霞 兵庫 植田 雅代

たもとほる桜並木の富尾川

掘割に遊ぶ黒鳥花筏

パン焼ける香にふい打ちの春の雷

何事も無きかの如き春の雲

朝桜光りを茲に集めけり

潮風と神戸の街とリラの花

春光に白き土蔵の家紋かな

蹴球の熊野の神に桜咲く

花仰ぐ硯手に取り那智詣

一番に青岸渡寺の春あした

教師連れ熊野古道で春休

寄り添ふと言ふ事難し柳絮飛ぶ

妹遺すスケッチ半ばの桜草

園庭に猫型のバス春うらら

脇役と言へど華やか霞草

孕み猫喧騒なつかし市場跡

キヤッチボール父の張り切る春日和

海棠やさつと紅ひく昼餉あと

車止めに腰おろしたり花疲れ

葉ざくらや病む友遠く移り行く

吹きつける湯村の源泉名残り雪

アカペラの歌声背にし春の雪

大阪 八幡 操

兵庫 木本 彦

大阪 三井 尚美

兵庫 野沢 光代

兵庫 西駄いとの

震災に遠き日思う寒き朝

太陽の丘をころげて遠足子

常磐木の落葉ふみしめ御所の井戸

麗らかに山下清展緻密

触診の優しき手なり青葉風

箕面より春の便りと非常食

神戸弁電話の向かう三鬼の忌

不來方の空はそのまま啄木忌

塔までの坂ゆるやかに遅桜

大地震に春塵あげて落ちくる書

稲むらの火てふ読本思ふ春

春日のやさしき海が牙むきし

曆剥ぐ凶しき三月十一日

啓蟄や大地震の地よ甦れ

節電の街を灯せり花月夜

頭に肩に桜蕊留め立話

春疾風大川の鳥押し戻す

池囲む花は一重に人幾重

花祭小柄杓に足る誕生仏

語り合ふ口に甘茶の余韻あり

国中の喪中に桜そつと咲き

大阪 小菅美代子

埼玉 松岡 水学

東京 遠藤とも子

木野 裕美

堤 節子

樋口 正輝

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 〱十五句 奥田 妙子 〱

*選句は全て 品川鈴子

姥流のもんじゃ仕上がる日のうらら 松本 アイ

祖母から教わったもんじゃ焼きを作ってみた。それは小麦粉をゆるく溶き、具をあまり入れずに鉄板で焼きながら食べる料理。焼くときには鉄板にたねで字をかいて楽しんでことから「文字焼き」の転とか。流麗な仮名なども鄙びた郷の遊び心に、食文化として伝わる長閑さ。

スタイリスト腰に懐炉のふくれゐて 中村 碧泉

スタイリストとは、お洒落な人も指すが、この場合はプロとして俳優やモデルの衣装、髪型、小道具や全体の構成を整えながら職場できびきび目配りを効かせる役目。華やかな舞台を裏で支える要だから、無駄のない粋な身なりだろうか、働き盛りの体を懐炉で保温する慎重さ。

雉の来てざわめき起こる里鴉 長瀬 節子

雉は日本鳥学会の選んだ国鳥で春季に属する地上性の雑食鳥。雄は複雑美麗で尾も長く多数の黒帯があり、雌は淡褐色に黒斑で尾が短く、啼き交わす風情が古来情愛の深い鳥の代表格。片や鴉は同じ雑食性でも雌雄共に黒光りで、熊野の神の使いながら、不吉な啼き声と感させせる。さて両極端の群れに起こる動揺は、どちらに軍配があがるやら。

花見つづ相槌うてば知らぬ人 前田 玲子

日本人は桜が大好きである。毎年桜の名所は、大勢の花見客で溢れかえる。気の置けない友達とお喋りしながらの花見の楽しさはまた格別である。相槌を打ちながら興じていたら、いつの間にか知らぬ人に代わっていた。お互いにびつくり。

どの店もカーネーションで溢れる日 堀口香代子

母の目を狙う商戦は、二ヶ月も前から始まる。カーネーションがいつぱいのお花屋さん。どの店も、母の日の贈り物を選ぶと、紙のカーネーションを付けてくれる。母の日とカーネーションは切り離せない。いつまでも元気で居てねと、メッセージを添える。

被災地の球児春泥ものとせず

岡田満喜子

東日本大震災後の春の高校野球大会。「私たちは十六年前の阪神淡路大震災の年生まれました。今、東日本大震災で多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいつぱいです。被災地では、全ての方々が一丸となって、仲間と共に頑張っておられます。人は、仲間を支えられることで大きな困難を乗り越えることが出来ると信じています。私たちに今できること、それはこの大会を精一杯元気を出して戦うことです。」(選手宣誓より) 白いユニフォームにかかると泥などものともせず、力の限り戦っている姿は、応援する私達の心を打つ。若いエネルギー、お互いに頑張ろうという気力を貰う力強い句である。

去る友と新しき友春来る

松尾 静代

年年歳歳 花相似たり

歳歳年年 人同じからず(漢詩劉希夷)

自然の永遠性と人生の有限性を対比させてうたう。去ってしまう友、何かの縁で新しい友が出来る。今年も変わらない春である。

リラの花異国エステで眉描く

中村 吟子

外国旅行は、心身共にリフレッシュ出来る。風景を眺め、街を歩き、いろいろ食べて、いつぱい買物を楽しむなかで、その国の文化に触れる。自分自身への褒美はエステ。リラックスした時間の中で、新しい自分との再会を待つ。リラの花咲く異国にて沢山の想い出が出来たことであろう。

乖離したままの交渉春霞

植田 雅代

どんな交渉ごとであろうか。とかく交渉ごとは難しいものだ。纏めるべき課題には大小あろうが、双方の駆け引きもなかなか慎重なのであろう。この話は上手く整うだろうか。春霞という季語を上手く使われたことが良かった。